

# 令和5年度 研究実践まとめ

## 研究主題

話す力を身に付け、意欲的なコミュニケーションを生み出す外国語科・外国語活動の指導  
～考えながら話す姿を目指して～

### 【令和4・5年度の研究の振り返り】

#### 成果（○）と課題（▲）

##### ○伝え合って驚きや発見のある活動の場を設定

\*児童の実態に合わせ課題を設定することで、主体的に学習に取り組む姿があった。また、伝え合う必然が生まれ、既習表現を駆使し、工夫しながら何とか伝え合おうと粘り強く取り組む児童の姿を生み出すことができた。児童が「困ったな」と立ち止まり、どう表現するか悩む姿を生み出す場面を設定し、活動することができた。このことは児童が「考えながら話す姿」を生み出す基になった。

##### ○Teacher's Talk からの課題化

\*Teacher's Talk で本時にすることを担任とALTがデモンストレーションで行い、課題化につなげた。少ない説明で本時の活動を示すことで、児童に見通しをもたせ、意欲を高めることができた。また、Teacher's Talk から活動に入ることで、英語での会話を聞く意識も高まり、授業に集中する姿につながった。

##### ○評価方法の工夫

\*授業の終末には、外国語の表現に関することと本時の課題に関することの2つの視点から振り返りを行った。「英語で何と言えばよいか」だけでなく、「何が分かったのか」「知りたいことが分かったか」などについても共通理解を図り、課題と評価を常に意識し、主体的な学びを生み出すことができた。

#### ▲知識・技能の定着

\*単元終末の活動で、本単元で学んだ表現の定着が不十分で、活動に不安を感じ戸惑ってしまう児童がいた。→今年度、研究の在り方を精査するために、【知識・技能】を重点とした研究授業を行った。語句の定着には、繰り返しの指導が必要であることや、デジタル教科書やICTの効果的な活用が重要であることを共通理解することができた。また、外国語科・外国語活動は、外国語による言語活動を通して資質・能力を育成するという教科の目標を踏まえ、教員自身もなるべく多くの英語を使い、雰囲気づくりが大切であることを再確認することができた。

#### ▲Half Time の在り方

\*児童の困り感を解決するはずのHalf Timeが十分に機能せず、児童の困り感が解決されることなく授業が進んでしまうことがあった。→今年度は、Half Timeでどのようなことを指導したいかを教師が明確にした。児童の実態に応じて、その場で判断して入れなければいけない場合もあるが、不十分な部分があった。また、全体で入れるか、個別に入れるかなど、授業のねらいに応じたHalf Timeの在り方をさらに深める必要があることを確認することができた。

### 【来年度に向けて】

\*令和6年度は、特例校が外れるため、1・2年生は外国語活動を行わず、主に生活科の学習を通して、「主体的なコミュニケーションを生み出す」学習指導の研究の在り方を研究していく。